「遊学」のすすめ

学生部長　三好信浩

ヨーロッパでは、古くから、若者たちが大学都市を渡り歩く遊学の慣行があったし、ドイツの大学は、学生に転学の自由を認めていた。日本でも、江戸時代の若者は、文武の修業のため各地を渡り歩いたし、蘭学修業のごときは長崎遊学がその第一歩となった。幕末維新期には海外に留学する者も多くいた。

近代になって、帝国大学を頂点とする学校体系が確立すると、大学を卒業して学士号を取得することに価値があるとされたため、学生は一つの大学にとどまり、学期や学年の試験を受け、脱落すれば退学するしかなかった。外国留学は、学士号取得者に博士や教授の資格を与えるためのハクづけに使われた。

国際化が進む現代、学生時代に外国に遊学することの意義が見直され、外国の大学で取得した単位も、本学の卒業単位として認定されるようになった。さらに、内なる国際化も進み、本学の十一学部の開講する授業は、原則として全学生に公開されることになっているし、他の大学で取得した単位も、本学の単位に加えられることになっている。

もう一つの重要なことは、これからの大学は大学院に重点を移しつつあることである。東大や京大などに行きたい者は、四年後にそれらの大学院に進めばよいし、逆にそれらの大学に入学してもよい教授にめぐり合えない者は、本学の大学院に移ればよい。現にそのような学生はふえつつある。

「遊学」のもつ現代的意義は大きい。

初めに書物ありき

附属図書館長　藤本黎時

新入生の皆さん入学おめでとう。皆さんがこれから利用することになる図書館は、広島地区及び東広島地区両キャンパスにそれぞれ三つある。皆さんにとって、図書館は教室とともに一番利用する施設となるはずである。

人間の日常的生活も、また知的活動も、その根源は言葉から成り立っている。図書館とは言葉の一杯詰まったところといっていい。「初めに言葉があった」という聖句を借りて言えば、「初めに書物があった」というわけである。図書館に入ると、書架に並べられた膨大な数の本にきっと圧倒され、自分の持つ知識の乏しさを思い知らされる。しかし、書架には、難解な学術書ばかりでなく、豊かな人生体験に触れさせてくれる書物や楽しい読み物も並んでいる。手にとって読んでみたくなる本がたくさん見つかるはずである。

脳細胞の発達は、倦まずたゆまぬ学習によってのみ成し遂げられるといわれている。鉄は熱いうちに打たなければ刀に加工することが不可能となるように、若いうちに一生懸命学ばなければ、脳細胞は発達しない。授業で与えられる知識をただ受動的に詰め込むだけでなく、自分で積極的に知的真実を求めて図書館を大いに利用してほしい。必要に迫られて求める知識もあるが、直接には役に立たない知識を求めて努力することも必要である。表面上は実りがなかったように見えても、知的真実にひたっているうちに、やがていつの日か、これが実を結ぶことになるだろう。

図書館が、皆さんにとって知的刺激の場であると同時に、知的遊びの場にもなることを願っている。